勤務先の伊豆介護センターでは、主にパソコンを使って経理や広報を担当。

2018年のボッチャワールドオープンで団体金メダルを獲得し、職場の仲間から祝福を受ける杉村選手。

県内小学校で行った講演及びボッチャ体験会の様子。子どもたちも世界チャンプの技に興味津々。

伊東から世界一へ！夢は意識、行動、そして日々を変えます。

東京パラリンピック ボッチャ個人金メダリスト
有限会社伊豆介護センター職員

杉村 英孝（ひで たか）さん

1982年、伊東市生まれ。先天性脳性麻痺のため、小学校から高校まで静岡市の医療施設に入所しながら県立特別支援学校に通う。高校3年時にボッチャと出合い、翌年仲間と初めて出場した県内大会で団体3位。2001年より伊東市の有限会社伊豆介護センターに勤務。2010年、国際大会デビュー戦の広州アジアパラ大会で個人5位入賞。パラリンピックには2012年ロンドン大会から3大会連続出場。2016年リオ大会から主将を務め団体銀メダル、東京2020大会は個人金メダル、団体銅メダルを獲得。昨年、紫綬褒章を受章。

東京パラリンピックのボッチャで個人金メダルに輝いた杉村英孝選手。今や世界を代表するパラアスリートだが、「ボッチャは、仲間と会うためのツール、社会とつながるきっかけという意味合いが強かった」と当初を振り返る。

先天性脳性麻痺で小学校から高校まで静岡市の県立特別支援学校に通った杉村選手が、本格的に競技を始めたのは郷里の伊東へ戻り、社会人になってから。伊豆介護センターで働きながら試合で好成績を上げると、「伊東から世界へ」が夢になり、東京パラ大会の金メダル獲得で「伊東から世界一」の偉業を成し遂げた。

パラ選手として競技を続けるのは容易ではない。仕事と競技を両立する環境づくりに加え、資金面のハードルも高い。「でも、今の職場はとても理解があります。地元の後援会がサポートしてくださり、東京パラ大会では市を挙げての応援も受けました。だから金メダルというカタチで皆さんに恩返しができて本当に良かったと思っています」と杉村選手は微笑む。一方で「自分の活躍で地元に明るい話題を届け、少しでも地域活性の一助になれば嬉しいです」と郷土愛も語る。

「東京パラ大会では、夢を持つ喜びと、叶える喜びを感じました。夢を持てば意識が変わるし、意識が変われば行動も変わる。夢は日々を充実させてくれます。でも、それに挑戦できるのは、応援してくれる人たちがいるからこそ。これからも皆さんと喜びを分かち合えるように頑張ります」。夢を持ち続ける杉村選手の挑戦に終わりはない。